

「えほん meets 博物館」の実践による 博物館利用の促進

—他施設との連携による地域文化の創出—

独立行政法人国立科学博物館 連携推進・学習センター 学習課

小川達也
河野由佳
矢作絵里子
中川典子

1. はじめに

国立科学博物館では、「親と子のたんけんひろば コンパス」という未就学児とその保護者を対象とした展示エリアを平成27年に開室し、当該対象者向けの事業開発を行っている。「えほん meets 博物館」もこうした事業の一環であり、子供に身近な絵本を用いた展示観覧という手法を提案し、未就学児とその保護者の積極的な博物館利用を促すことを目的としている。また、全国の博物館で同様の事業が広がることで、未就学児向けの事業への取り組みや開発の契機となることを目指しており、「えほん meets 博物館」は他館での実施も含め計20回開催をしている。

ここでは、今年度を実施した事例の紹介を行うとともに、国立科学博物館で新たなテーマで「えほん meets 博物館」を実施した際に、近隣の図書館に協力を得て開発を行った事例についても紹介する。そして、この図書館等の地域の機関との連携の可能性について、考察を行うものである。

2. 「えほん meets 博物館」のコンセプト

「えほん meets 博物館」は、「絵本を持って博物館をまわってみよう」をテーマとし、絵本に関連付けた博物館観覧の手法を、未就学児を持つ保護者や教育関係者へ提案している。特に、これまで博物館に来たことが無い未就学児とその保護者を博物館に呼び込み、絵本を介した博物館の新たな楽しみ方を提案し、博物館体験を家庭に持ち帰ることで、未就学児の学びを深めていくことを目的としている。

当初の開発においては、未就学児を持つ保護者のみを対象にしたイベントとして企画を行っ

ていたが¹⁾、現在では主に未就学児を対象として設定し、他館での汎用性を持った事業として展開が出来るような構成を持っている²⁾。

3. 「えほん meets 博物館」の開催事例

今年度開催を行った事例は下記の通りである。

開催日	開催館	絵本	参加者数
2018.9.23	三笠市立博物館	『せいめいのれきし 改訂版』	16名
2018.9.24	滝川市美術自然史館	『せいめいのれきし 改訂版』	16名
2018.11.4	蒲郡市生命の海科学館	『せいめいのれきし 改訂版』	13名
同日午後	蒲郡市生命の海科学館	『せいめいのれきし 改訂版』	17名
2018.12.15	北海道博物館	『せいめいのれきし 改訂版』	19名
2019.1.19	北海道博物館	『せいめいのれきし 改訂版』	一名※
2019.2.3	国立科学博物館	『はなのあなのはなし』	一名※
2019.2.9	国立科学博物館	『はなのあなのはなし』	一名※

※本要旨提出時において未実施のイベントの参加者数については記載なし。

3.1 『せいめいのれきし 改訂版』を使った事例

岩波書店刊行の『せいめいのれきし 改訂版』は、「えほん meets 博物館」事業の先駆けとなった絵本である。過年度においても、この絵本を用いて事業を実施してきており、当館だけでなく、地域の博物館においても実践事例がある³⁾。

今年度においても、当館で実施している事業である巡回ミュージアム開催館でのイベントの実施や過年度から継続開催している館での実施が行われた。

3.1.1 三笠市立博物館および滝川市美術自然史館での実施事例

三笠市立博物館で2018年7月14日から10月14日に開催された特別展「せいめいのれきし」の関連イベントとして、「えほん meet 博物館」を開催した。この特別展は、平成30年度文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」と

- 1) 当初の開発にあたっては、①豊かなイメージを持ち絵本と向き合えるよう、絵解きのように挿絵から物語を楽しむ方法を提示する、②繰り返し親子で絵本を共有する時間の中で次第に会話が豊かになるよう、担当編集者や監修者の思いなど絵本にまつわるバックグラウンドを要素として届けるといった点を要とした。これは、文部科学省「幼稚園教育要領」の言葉領域の取り扱いにおける「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結びつけたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにする」という留意点や、秋田(2008)による「大人が子どもたちと絵本との出会いの場やコミュニケーション過程を通して絵本の世界に誘うことで、子どもは絵本の楽しさや面白さを知る」などの指摘を踏まえたものであったが、①②の要素を踏まえたうえで、博物館の状況や対象、絵本の内容によって、アレンジを行っている。
- 2) 過年度の実施の報告は、過去の全国科学博物館協議会研究発表大会で報告を行っている。報告内容については、HPを参照。
- 3) 脚注2と同様に、詳細については全国科学博物館協議会HPの研究発表大会ページを参照。

して行っている巡回ミュージアムの一環として、開催されたものである。特別展の開催期間中に、『せいめいのれきし 改訂版』の監修者でもある当館研究者の真鍋真が講師となり、絵本を片手に特別展の展示内容を紹介するツアーのような形でイベントを実施している。対象は5歳から小学3年生の子ども1名とその保護者1名の親子ペアという形で募集を行っている。

また、三笠市立博物館からいくつかの市町村を隔てたところにある滝川市美術自然史館においても、三笠市立博物館での特別展への資料貸出を行っているなど事前に交流があり、三笠市立博物館での開催に併せて「えほん meets 博物館」を実施した。この館においては、既存の常設展示にある骨格標本等を活用して、未就学児・小学生の子供と保護者を対象に、イベントを実施している。



▲ 三笠市立博物館での実施の様子



▲ 滝川市美術自然史館での実施の様子

3.1.2 蒲郡市生命の海科学館での実施事例

蒲郡市生命の海科学館においては、平成28年度から毎年度継続的に『せいめいのれきし 改訂版』を用いて「えほん meets 博物館」を開催しており、実施回数としては単館で最多となっている（今年度の2回を併せて計10回）。実施を重ねるごとに実施方法や対象設定についての検討を行って改良が加えられている。今年度は募集対象を「どなたでも」という形で募集を行い（結果として、未就学児とその保護者、小学生とその保護者だけでなく、一般の方の参加もあった）、既存の常設展示を用いて、実施館の職員によって開催されている。



▲ 蒲郡市生命の海科学館での実施の様子 ▲

3.1.3 北海道博物館での実施事例

北海道博物館で2018年12月8日から2019年1月20日まで開催された、「国立科学博物館・巡回ミュージアム「生命のれきしー君につながるものがたり」」の関連イベントとして「えほん meets 博物館」を開催した。この特別展も平成30年度文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」として行っている巡回ミュージアムの一環として、開催したものである。巡回ミュージアムの開催中に2回、「えほん meets 博物館」を実施し、巡回ミュージアムでの展示内容と常設展示の内容を含めてイベントを行った。対象は、未就学児（5歳以上）～小学3年生の子供と保護者に設定し、イベントの実施は館の職員によって行われている。



▲ 北海道博物館での実施の様子 ▲

3.2 国立科学博物館での実施事例

国立科学博物館においては、「えほん meets 博物館」の開発以後数回、イベントを実施している。当館での実施を踏まえて、他館でも同様に本事業を実施できることを目的としてきたが、今年度はこれまで扱ってきた絵本だけでなく、他館のもつ既存の常設展示を活用した内容で実施しやすい形を目標として開発を行うことにした。

また、他館で「えほん meets 博物館」のような、絵本を活用した未就学児とその保護者を対象としたイベントの開発を行う際に、どのようなプロセスを経ることが必要であるか、他施設との連携がどのような効果があるかについても考察を行っている。

3.2.1 国立科学博物館でこれまで実施してきた絵本

これまで「えほん meets 博物館」を実施した絵本は下記の2つである。

①

『せいめいのれきし 改訂版』 刊行：岩波書店
バージニア・リー・バートン 文・絵/
石井桃子 訳／ 真鍋真 監修



②

『《科博の絵本》くらべてわけてならべてみよう！』
刊行：創元社
国立科学博物館 作／ 見杉宗則 絵



3.2.2 それぞれの絵本の特徴

①『せいめいのれきし 改訂版』は、生命史（自然史）を扱っている博物館にとってフィットする内容であり、他館においては常設展示に地球誕生からの歴史や化石を展示している館での実施や、当館の巡回ミュージアムでテーマに合うような展示を行っている時期に実施事例がある。未就学児とその保護者を対象とする以外にも小学生以上を対象にしたイベントとして試みられたこともあった。この絵本は、ある1つの時代を舞台の一場面として描いて表現され、それを解説する文章が見開き1ページに収められている。こうした点から4歳から6歳の未就学児にとって、文章側を読みすすめることが困難な場合もあり、その場合は挿絵を見ながら、進行役が説明を加えていくような形で絵本を紹介し、この絵に出てきたものと同じあるいは同時期の展示物を紹介するようなツアーを実施している。

②『くらべてわけてならべてみよう！』については、当館で1度開催したのみで、他館での実施事例はない。この絵本のテーマが博物館における分類を扱っており、様々な展示物の観察をした上で、共通項目を見つけ出し、それに沿って分類を行っていく内容となっている。「えほん meets 博物館」での実施においては、いくつかの展示物を指定し、その展示物の特徴を参加者が見つけ出し、その特徴から参加者が定めた基準に基づいて分類を行うワークを実施した。この絵本は、特定のテーマというよりは、博物館資料を観察し、色や形や特徴など、参加者が見つけた項目をもとに分類を行うため、博物館資料から導き出される概念的なものを扱っている点に特徴がある。

3.2.3 新たなテーマの選定

今後、さらに「えほん meets 博物館」のような絵本を活用して未就学児の博物館利用を促進するという手法を広げていくために、今年度の国立科学博物館で実施においては、新たなテーマ（絵本）を選ぶことにした。その際に配慮をした点は、①多くの館園にとって汎用性と具体的なテーマ性のあるものとする、②対象を未就学児とすることにおいて、絵本を読んで理解をすることよりも、博物館資料の観察・比較することをメインとして行うことの出来るものとする、の2点に留意をしている。

3.2.4 絵本の選定について

絵本の選定においては、インターネットで検索をすれば、各出版社のサイトや絵本紹介サイトにおいて、内容や年齢別での検索などを行うことが出来る。選定においては、こうした検索を通じて、実施したい内容をもとにして調べることも可能であるが、今回の「えほん meets 博物館」での絵本の選定においては、こうした検索に加え、近隣の図書館に相談を行って選定を行った。これは、上野地区にも社会教育施設として図書館があり、この図書館では児童書を専門的に扱っている点で、検索で一方向的に調べるよりも、専門的な知見を活かして横断的に様々な情報を集めることが出来ると思ったためである。また、レファレンスを通じた連携という点に今後の可能性を見出した点もその理由である。

3.2.5 実際の選定プロセス

新たなテーマでの開発においては、多くの博物館が展示をしている動物の剥製を元に観察・比較が出来るものを重点的に検討した。また、単純にそれぞれの動物の特徴についての観察を行うのではなく、それぞれがもつ共通項を元にして観察箇所を絞る方法を取ることにした。

そして、今回は「鼻の穴」をテーマに決定している。絵本の選定においては「鼻の穴」というキーワードを元に絵本を調べるだけでなく、近隣の図書館の方にイベントの趣旨や対象年齢、絵本の使用方法と「鼻の穴」というテーマを伝え、レファレンスをお願いすることで選定を行った。図書館からは日本において出版されている絵本を横断的に検索いただき、数冊の紹介をいただいた。この結果、福音館書店が刊行している、柳生弦一郎作の『はなのあなのはなし』を絵本として選定した。



3.2.6 実施に向けた出版社とのやりとり

実施に向けては、出版元への問い合わせを行い、イベント趣旨の説明と絵本の使用方法、イベント実施の際の参加形態や参加費等に関する情報を予め伝えている。今回の「えほん meets 博物館」における絵本の使用においては、出版社に「著作物利用許可申請書」を提出し、著作権者への確認を出版社から行った上でイベントを実施することとなった。イベント実施においては、使用する絵本は当館で購入を行い、投影等での使用は利用範囲外となるため、実物の絵本を見ながらの読み聞かせを行う。

3.2.7 実施事例

本事業の実施は、この要旨を執筆しているよりも以後に行う予定のため、本稿では割愛し、全国科学博物館協議会研究発表大会の発表時に報告を行う。

4. 地域文化の核に向けて ～連携によって何がもたらされるか～

平成 27 年に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針」(第 4 次方針)において、「美術館、博物館、図書館等が、優れた文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、地域の生涯学習活動、国際交流活動、ボランティア活動や観光等の拠点としても積極的に活用され、地域住民の文化芸術活動の場やコミュニケーションを通じた絆づくり、感性教育、地域ブランドづくりの場としてその機能・役割を十分に発揮できるように～」という目的のもとで「地域の美術館、博物館等の館種や設置者の枠を超えた連携・協力を促進する。」とあるように、同じ地域での連携・協力によって、地域住民の文化芸術活動を拡充することにつなげていくことが、地域文化の核として博物館が機能していくことに重要であると考えられる。

今回の事例においては、「えほん meets 博物館」が目的としている未就学児とその保護者の博物館利用の促進という点において、絵本の選定に近隣の図書館へのレファレンスを行うことで、図書を専門に扱っている図書館の方の知見を活かしている点に特徴がある。これは、普段から絵本や児童書を扱っていて、図書館での絵本の読み聞かせイベントなどを通じてそれぞれの絵本についての未就学児の反応を知っている図書館の職員の方の経験や知見を、「えほん meets 博物館」で使用する絵本の選定に活かすことで、本事業の参加者へのサービスの向上につながると考えたためである。博物館と図書館はそれぞれ別々の機能をもっている社会教育機関であるが、自身の機能としては持っていない、あるいは専門的でない機能を補完する形での連携を行うことで、施設の利用者（参加者）にとっての新たなサービスの創出やサービスの質の向上という点で、意義のあるものと考えられる。

また、今回のレファレンスを通じて、本件とは別に「図書館にとっても博物館に相談しないと解決が難しいような事案がレファレンスとして寄せられることがあり、どのような対応をしていくべきか迷うことがこれまであった」という意見もあった。こうしたところにも、更なる連携の可能性が秘めていると考えられるかもしれない。

別の観点から言えば、MLA 連携という点においては、博物館・図書館・文書館の共通性と異質性を相互に活かすことが目的と考えられているものであるが、共通性という点でのデジタルアーカイブによる連携だけではなく、異質性という点に目を向け、それぞれ施設の得意な分野を活かして連携をしていくことも重要であろう。もちろん、これまで様々なケースでの博物館・図書館、それ以外の機関との連携は全国の至る所で実施されているが、連携を通じて新たに実現出来ることに目を向け、相互の機関にとっての利益のみならず、それぞれの機関の持つ資料の利用や、利用者への新規のサービスの創出やサービスの向上という点で議論が交わされていくことが、地域全体での文化の成熟を考える際に必要なのではないだろうか。

●謝辞

今回の「えほん meets 博物館」の実施に際し、三笠市立博物館、滝川市美術自然史館、蒲郡市生命の海科学館、北海道博物館の皆様と、絵本の選定にご協力をくださった国立国会図書館国際子ども図書館の皆様、それぞれの絵本の出版を行っている株式会社岩波書店、株式会社創元社、株式会社福音館書店の皆様にご多大なるご協力をいただいたことに感謝申し上げます。また、本事業の三笠市立博物館、滝川市美術自然史館、北海道博物館での「えほん meets 博物館」の実施は、平成 30 年度文部科学省委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」によるものです。関係者の皆様に感謝申し上げます。

